



Osaka Gakuin University Repository

Title	熊本県天草市の五和町におけるイルカウォッチング (エコツーリズムケーススタディノート) Dolphin Watching in Itsuwa-machi, Amakusa, Kumamoto
Author(s)	D. M. アラカキ (Daryl Masao Arakaki) 照屋 哲男 (Tetsuo Teruya)
Citation	大阪学院大学 商・経営学論集 (OSAKA GAKUIN UNIVERSITY REVIEW OF COMMERCE AND BUSINESS ADMINISTRATION), 第 42 巻第 2 号 : 49-60
Issue Date	2017.03.30
Resource Type	NOTE/ 研究ノート
Resource Version	
URL	
Right	
Additional Information	

熊本県天草市の五和町におけるイルカウォッチング (エコツーリズムケーススタディノート)

D. M. アラカキ・照屋 哲男

Dolphin Watching in Itsuwa-machi, Amakusa, Kumamoto

Daryl Masao Arakaki · Tetsuo Teruya

ABSTRACT

A community of about 200 Indo-Pacific Bottlenose Dolphins live in the waters off of Itsuwamachi in Amakusa City, Kumamoto Prefecture. Since 1993, the local fishermen have conducted dolphin watching tours as a business. This research note will introduce and discuss the dolphin watching in Amakusa as one example of ecotourism.

I. 概要

熊本県天草下島の沖には、年中約200頭のみナミバンドウイルカ (*Tursiops aduncus*) が生息している。1993年から天草下島の五和町の魚師たちはイルカウォッチングツアーをビジネスとして実施している¹⁾。このノートでは、その天草におけるイルカウォッチングツアーを「エコツアー」の例の一つとして紹介する。

II. 「エコツーリズム」の定義とイルカウォッチング

国際エコツーリズム協会「The International Ecotourism Society (TIES)」によると、エコツーリズムというのは「環境を守りながら、現地の人々の福祉に還元し、インタープリテーションと教育を含む責任感を持った自然のエリアへの旅行」とされている²⁾。日本エコツーリズム協会の定義によると、「エコツーリズムとは：1) 自然・歴史・文化など地域固有の資源を生かした観光を成立させること。2) 観光によってそれらの資源が損なわれないよう、適切な管理に基づく保護・保全をはかること。3) 地域資源の健全な存続による地域経済への波及効果が実現することをねらいとする、資源の保護+観光業の成立+地域振興の融合をめざす観光の考え方である。それにより、旅行者に魅力的な地域資源とのふれあいの機会が永続的に提供され、地域の暮らし

1) Miki Shirakihara, Kunio Shirakihara, Jyunji Tomonaga, Megumi Takatsuki, *A Resident Population of Indo-Pacific Bottlenose Dolphins (Tursiops Aduncus) in Amakusa, Western Kyushu, Japan*, MARINE MAMMAL SCIENCE, 18(1):30-41 (January 2002).

2) 英語の原文：“responsible travel to natural areas that conserves the environment, sustains the well-being of the local people, and involves interpretation and education” (TIES, 2015). <http://www.ecotourism.org/what-is-ecotourism>

が安定し、資源が守られていくことを目的とする。』³⁾ どちらの定義によっても、エコツーリズムの基本原理の一つは観光の自然環境への悪い影響を最小限に減らすことである。その理念に従って、イルカウォッチングをする観光客はイルカにケガさせない、イルカの生息場所に悪い影響を与えない方法で野生イルカの観察を楽しむべきである。

Ⅲ. イルカウォッチングが出来る場所

簡単に説明すれば、イルカウォッチングというアクティビティは「海で船に乗って、泳いでいる野生イルカを見る」と言う事である。野生イルカの観察はクジラウォッチングと関係している。初めてのクジラウォッチングは1940年代にアメリカカリフォルニア州サンディエゴで始まったと言われている。1950年、サンディエゴのカブリロ国立モニュメント（Cabrillo National Monument）にクジラウォッチングスポットが出来、最初の冬季に観光客10,000人が訪れた⁴⁾。その後、クジラ観察を目的した観光客は、同じ海にいるクジラの仲間であるイルカも見erようになった。日本での、初めてのクジラウォッチングツアーは1988年に小笠原諸島の母島で行われた⁵⁾。現在、日本のクジラウォッチング・イルカウォッチングが出来る場所として、次の地域が知られるようになって⁶⁾：

3) 日本エコツーリズム協会HP: <http://www.ecotourism.gr.jp/index.php/what/>

4) Erich Hoyt, *Whale Watching*, *ENCYCLOPEDIA OF MARINE MAMMALS* (2002) at 1305-1310.

5) 水口博也、*クジラ・ウォッチングガイドブック*、(2002) at 120.

6) 水口博也、*クジラ・イルカ大百科*、(2005) at 253.

表1：ホエール・イルカウォッチングが出来る場所

北海道の標津：ミンククジラ、イシイルカ、カマイルカ（4～10月）
北海道の室蘭：カマイルカ、イシイルカ、ミンククジラ（5～8月）
千葉県の銚子：スナメリ、カマイルカ、ハナゴンドウ（5～8月）
東京都の御蔵島：ハンドウイルカ（4～10月）
東京都の小笠原：ザトクジラ（2～4月）、マッコウクジラ、 ハンドウイルカ、ハシナガイルカ（通年）
和歌山県的那智勝浦：マッコウクジラ、ハナゴンドウ、 ハンドウイルカ（4～9月）
高知県の室戸：マッコウクジラ、ハナゴンドウ、ハンドウイルカ（通年）
高知県の大方町、佐賀町、下ノ加江：ニタリクジラ、マイルカ、ハナゴンドウ、オキゴンドウ（3～11月）
熊本県の天草：ハンドウイルカ（通年）
沖縄県の座間味、渡嘉敷：ザトクジラ（1～3月）
沖縄県の久米島：ザトクジラ（1～3月）

出所：水口博也、クジラ・イルカ大百科、(2005) at 253を加工

IV. 天草におけるイルカウォッチング

天草の五和町では、イルカウォッチングが1993年に始まった⁷⁾。現地の人のによると、初期のころはお客さんが少なかったようだ。しかし今から約10年前、ある有名芸能人グループが、天草でのイルカウォッチングをテレビ番組で紹介したことがあり、その後観光客の人数が急増した⁸⁾。一見すると、五和町はとも静かな漁村のようだが、イルカウォッチングを商業とするオペレーターは

7) Miki Shirakihara, Kunio Shirakihara, Jyunji Tomonaga, Megumi Takatsuki, *A Resident Population of Indo-Pacific Bottlenose Dolphins (Tursiops Aduncus) in Amakusa, Western Kyushu, Japan*, MARINE MAMMAL SCIENCE, 18(1):30-41 (January 2002).

8) 宿の従業員の証言 (2016年2月21日)。

14社あるそうだが⁹⁾。イルカウォッチングツアーで使用している船は、定員12人の漁船から定員35～47人のクルーザータイプの船までである¹⁰⁾。漁村の漁船を使っているため、ほとんどのツアーガイドは現地の魚師である。イルカウォッチングブームの到来前、魚師にとって、イルカはイワシを食べる厄介な存在であった。しかし、現在その同じイルカは魚師の大切な収入源の一つとなっている。天草市にとって、イルカウォッチングは「観光の目玉的存在」であって、平成26年に観光客96,680人がツアーに参加した¹¹⁾。

会社よっての値段設定は異なるが、いくつかの会社の宣伝を調べてみると、所要時間1時間のイルカウォッチングツアーの値段はだいたい大人2,500円、小学生1,500円、2歳以上500円、2歳未満無料となっていた¹²⁾。イルカに会える確率は98%という売り文句を使いながら、イルカを見ることができなかった場合、もう一度ツアーに参加できるという補償をする会社もある¹³⁾。イルカウォッチングツアーが発着する港には、五和町観光協会が設置した看板に、次のイルカウォッチング自主ルールが書いてある：

-
- 9) Amakusa Treasure Island Tourism Association: <http://www.t-island.jp/en/amazing/dolphins.html>
 - 10) イルカマリンワールドのHP： http://im-world.jp/ship_info.html
 - 11) 天草市観光振興アクションプラン（平成27年～平成30年度）： <http://www.city.amakusa.kumamoto.jp/page1368.html>
 - 12) イルカウォッチング受付予約センターのパンフレット、イルカマリンワールドのパンフレット、Dolphin Cruise Amakusaのパンフレットにより。
 - 13) イルカマリンワールド、Dolphin Cruise Amakusaのパンフレットにより。

表2：五和町観光協会のイルカウォッチング自主ルール

- ・イルカの食餌や交尾・出産など自然な行動を防げません
- ・野生のイルカに、餌付けはしません
- ・イルカの群れから200m以内の航行は減速します
- ・ウォッチング中の船とイルカの群れとの距離は、群れのほうから船に接近するときを除いて、30m以上の距離をおいて操船します
- ・イルカと並走し、減速して操船します
- ・イルカの群れに突っ込まない、群れを追いかけません
- ・地元漁船保護のため、次のルールを守ります
 - ・素潜り漁船には、200m以内に接近しない
(素潜り漁船の左舷側には絶対入らない)
 - ・一本釣り漁船とは、一定の距離をとること

V. フィールド調査のメモ

2016年2月22日に、筆者たちはフィールド調査をするため、イルカウォッチングツアーに参加した。下記はその日の観察メモである。

- ・私たちが使った会社は1日5回の出港（10時、11時30分、13時、14時30分、16時）を行っている。私たちは、イルカを見ることができなかった場合、2回目の乗船が午後になるかもしれないことを想定し、念のために10時に出港しているツアーに予約した。
- ・乗った船は改造された小型漁船だった。観光客のため、船の前半に座席板3枚が設けられていた。
- ・私たちも含め、船の乗客は5人であり、乗組員は船長1人だけだった。私た

ちが乗船した以降、船長はあまり喋ることはなく、イルカに関する情報、又はツアーのインタープリテーション（イルカに関する説明とか）などをしてくれなかった。なかなかイルカに遭遇することができず、船長は携帯を使いどこかと情報交換を頻繁に行っていた。

- ・ ツアーの所要時間は1時間と言われており、あきらめかけたころイルカを発見した。10時54分であった。
- ・ イルカの群れを見つけてから、船が約20分間イルカを追いかけ続けた。この間にイルカの群れがずっと移動していたので、船もずっと追いかけて動いた。
- ・ 船はイルカの群れにかなり接近した。平行に進んだとき、船と群れの距離は10m以内に思えた。
- ・ 私たちの船以外にも、他の4隻がイルカの群れを追いかけていた。全5隻のお客さんは約20人だった。
- ・ イルカの群れは8頭～10頭程度であった。
- ・ 船が港に戻ったのは11時23分だった。
- ・ ツアーが終わってから、「午前中出港しているツアーより、午後に出港しているツアーのほうがイルカを見る確率が高い」と言われた。

Ⅵ. コメント

天草のイルカウォッチングツアーに参加して、いろいろなことに気づいた。野生イルカを見ることと水族館のイルカを見ることとは全然違うと。広い海の中で自由に泳いでいるイルカを見てから、イルカにとって小さすぎるように見えるプールでのイルカの姿はとても寂しく感じる。そのため、エコツアーとして、広い海を自由に泳ぎ回っているイルカを見るというアクティビティには価値がある。そこで、天草で行っているイルカウォッチングは本当の「エコツーリズム」として成立しているかどうかを分析した。

国際エコツーリズム協会によると、「エコツーリズム」というのは：「環境を守りながら、現地の人々の福祉に還元し、インタープリテーションと教育を含む責任感を持った自然のエリアへの旅行」¹⁴⁾この定義で、天草のイルカウォッチングを評価するため、4つの要素を確認してみた：

- 1) ツアーは環境を守っているかどうか？
- 2) ツアーは現地の人々の福祉に還元しているかどうか？
- 3) ツアーにはインタープリテーションと教育を含んでいるかどうか？
- 4) ツアーは責任感を持った自然の場所へのツアーであるかどうか？

この4つの要素のうち、2～4については問題なしと判断したが、要素1については疑問が出てきた。まず、要素2～4を考察したあと、要素1を考察する。

要素2番の「現地の人々の福祉に還元」について

天草でのイルカウォッチングツアーは地域の経済にいい影響を与えていると思われる。ツアーの船は現地の魚師の漁船で、魚を捕れないときの収入の源に

14) The International Ecotourism Society (<http://www.ecotourism.org/what-is-ecotourism>)

なると考えられる。年間100,000人に近いツアー参加者はツアーの前と後、地域の宿泊やレストランを使って、間接的な経済効果を起こす。現在の観光客の人数とツアーを運行する会社の数はイルカウォッチングツアー産業の成功の証拠だと思われる。

要素3番の教育について

港に設置してある看板には、基礎的なイルカ情報が書かれている。そして、ツアーを運営している会社の受付カウンターでも、パンフレットとイルカに関する本を手に入れることが出来る。

インタープリテーション（ガイドによる説明）という条件については個人差が感じられる。おそらくイルカウォッチング漁船の船長の中には、説明を不得意としている人もいるかもしれません。私たちが参加したツアーの船長は無口の方で、乗客とほとんど話さなかった。しかし、毎日イルカを観察している船長はきっといろいろな面白い話を持っていると思われる。そういう船長のために、五和町観光協会が何らかのガイドインタープリテーションに関する講座を実施すれば、観光客の満足度を高められるのではないのでしょうか。

要素4番の「責任感を持った自然の場所へのツアー」という条件について

天草のイルカウォッチングは確かに大自然の海の中で行われている。こういうツアーを認める観光客は、自然保護を認識している人の可能性が高い。そして五和町観光協会が導入した自主ルールはツアーの参加者に自然に対する責任感を持たせているように見える。

要素1番の「環境を守り」に関して

天草でのイルカウォッチングのやり方には改善を要求してもいいところもある。五和町観光協会が導入した自主ルールにはイルカの保護と繋がっている

ルールが入っているが、船を操作している船長がいつもルールを守っているかどうかは疑問になる。

実際にツアーに参加したとき、自分が乗った船と他の船4隻の動きを観察することが出来た。観光客を満足させるために、ルールで設定したスピードやイルカとの距離の制限を無視し、イルカに圧力をかけていると思われることが再三あった。また、ときどきイルカを観察するベストポジションに入るため、船と船の間のポジション取り合いは少し激しく、事故の発生が心配であった。そして、観光客を乗せた船がイルカの群れを追いかけるとき、イルカの生態に悪い影響を与えている可能性を感じた。研究者によると、船の数が増加すると、イルカの潜り時間は増加し、海面に出る時間は減少する。この行動は、イルカへストレスとして悪い影響を与えているため、研究者はイルカを観察するときの制限の導入を薦めている¹⁵⁾。

Ⅶ. まとめ

天草におけるイルカウォッチングは観光のアクティビティとして国際エコツーリズム協会の「エコツーリズム」の基準を満たしているようだ。

ツアーの実施方法と参加の仕方を見ると、運営する会社と参加する観光客両方にはある程度自然を守る責任感が共有されていると思われる。ツアーを運営する会社が提供している資料と出発の港に設置してある看板は、イルカに関する教育を行っている証拠だと思われた。ツアー参加者の人数は地域振興に役立っていることも考えられる。そして、現地の観光協会がイルカにケガをさせないための自主ルールも導入しているからである。

15) 松田紀子、白木原美紀、白木原国雄、天草下島周辺海域に生息するミナミバンドウイルカの行動に及ぼすイルカウォッチング船の影響、Nippon Suisan Gakkaishi 77(1), 8-14 (2011).

天草のイルカウォッチングはエコツーリズムの基準を満たしていると言えるが、改善の余地もある。多すぎる船が速いスピードでイルカの群れを追いかけていることはイルカに悪い影響を与えていると思われるため、自主ルールの強化は好ましいのではなかろうか。

Ⅷ. 写 真



天草イルカインフォメーション受付



自主ルールが書いている港に設置された看板



漁船タイプ9人定員の船



イルカの群れを追いかけている船



観察位置を取り合っている船



イルカと平行する船